

紫紺。白。橙。緋。それらが共存しうるのが『空』だ。

背の高い人工物が覆う余地のない空が赤色に染まっていく。田植えの準備がだんだんとなされていく地上のはるか上で、飛行機雲が一本ひかれている。西の方角ではすでに夜がおとずれている。人々は空を見上げずにはいられない。空にはそういううちからがある。

春の夕陽というのは水分を含んでいるように感じる。輪郭のじゃっかんぼやけた太陽が、そう思わせる。それが真ならば、冬のそれは湯水し切っていると云えるのだろうか。

何はともあれ、そういう印象を受ける。

昨今、春にしては暑く、秋にしては暑すぎる、という日が増えている。

しかし、卒業式当日の気温はまさに『春』そのものだった。カーテンを開けばおだやかな光が差し込み、窓を開ければあたたかですずやかな風が桜吹雪を運び、どこかで鶯が鳴いた。

訂正。気温というよりも、その日そのものが『春』そのものようだ。

お察しの通り、舞台は田舎である。

中学校は田畑と空き地に囲まれていた。正門を正面とするならば、背後のいくらか離れたところには山が見えた。校舎は耐震工事こそなされているが、外観はかなり汚れている。

いつだっただろうか。洗浄業者に清掃を頼むべきではないか、という意見は出たものの、FAXで送信されてきた見積もり金額の多額さにその意見は圧殺された。「本質は学ぶことだから、外観なんて別にどうでもいいじゃないか」という校長の一声で見積書はシュレッダーにかけられた。それを言った校長は翌年度には退職することが決まっていた。

校舎がくすんだ色のまま卒業式をむかえたのは、つまりそういうわけだった。汚いままの校舎は、しかし夕陽をあびてしまえばほとんど誰も気にしなかった。

十七時手前、学校から生徒の姿はほとんど消えていた。在校生らはどうに、卒業生らは三人を残して帰宅していた。

卒業式は昼前に終わっているので当然だった。早いうちの帰宅を喜ぶ在校生らは家で過ごさか友達と遊びに出かけ、卒業生のほとんどは打ち上げのようなものに参加している。

学び舎に残り、校内をふらふらと移動しつづけながら何時間もしゃべり続けた三人は、一歳にもならない頃からこれまでの時間を長く過ごした、幼馴染たちだった。

三人は、窓際最後列の席に集まって話していた。そこに差し込む夕陽はレースのカーテンを通して三人を照らしている。会話はいまもお衰えを知らない。

十五年という歳月の積み重ねだけがそれを可能にはしていなかった。三人の共に過ごした時間は、共有した経験はきれいでたのしいだけのものではなかった。それらがなかったわけじゃない。それでもやはり、峻険で、不快で、苦悩を伴う時間がややあった。

きれいでたのしいことだけが良いモノを形作るのではないと、三人とも十五歳ながら理解していた。いつまでも「これまで」の話をしているわけにいかないということも。

十七時半には帰るようにと教師に言われていた。

割れものにふれるように、話題は「これから」のものに移りはじめる。そつと、そつと、われるのがわかっている氷の上に足を乗せるように。しかしてわれた氷を大事にする覚悟を以って。

× × ×

完全下校時刻の三十分前になると、「ジムノペディ第一番」が小さな音量で流されはじめる。夕暮れ時の教室に残る三人——重永徹、田川京華、鈴木ふみは否が応でも終わりを意識した。これまでの時間の中で感じていなかったわけではない。ただ、三年間で刷り込まれた経験が、抗い続けていた三人によりやく諦めを付けさせた。

音楽が流れはじめた途端に、すこし、無言の時間が流れた。

妙に気まずい、変な間。おわりを意識しているがゆえにうまれた、間。そうであることを肌で理解し、口を開けずにいられたのは徹と京華のふたりだった。ふたりの視線は所在なさにに床にむけられた。

恥ずかしげもなく——いや、恥ずかしがる理由がわからないというふうには、言葉に詰まることなく、すつと自然に、ついに言ったのはふみだった。視線は夕暮れの校庭に。

「やっぱり……ふたりとべつべつになるのやだなあ……まだまだいっしょにいたい」

眼鏡をかけたおさげの彼女は、三人のなかで最も小柄で臆病のように見えて、いざというときは最も勇気を発揮する女性だった。思ったことを割とすぐに言ってしまうところは彼女も自覚する欠点ではあったが、この場では利になった。

徹と京華はすつと顔を上げ、ふみの顔を見る。彼女は見られていることに気付かない様子で、校庭をじつと見つめている。最後の景色を見る目はやさしげでもかなしげでもあった。

「……そんなこと言わないでよ、私だってそうだ」

短髪で褐色の、いかにもスポコン系というふうな京華は、気丈に言った。努めてはいない。妹分のように感じていた彼女が発揮した勇気に感化され、自然と彼女は元の強気を取り戻していた。京華は、自身の臆病さからくる蛮勇とはちがうものをもった親友を、ここから尊敬している。

「……そういうこと、いつもふみが言ってくれるよね」

徹は称賛をこめてまっすぐ言った。やさしい口調の彼は、黒縁のメガネをかけている。中学受験をするはずだった彼が今もなおここにいるのは、勉強熱心な父母に真っ向から中学受験を固辞したからだ。穏やかな正確の彼がそうした理由はもちろん共にいるふたりにあった。

恥ずかしがり屋であり思慮深い彼がそんなことをふたりに行ったことは、もちろんなかった。

ふみはおどろきに目を開きつつ、口もとには恥ずかしさでくりにやりと曲線を描いた。

「え、え？ 褒めたってなにもでないよ？」

「私たちはどうにもその素直さが無いから、うらやましいよ」

ね、と同意を求められるまでもなく、徹はうんうんと頷く。

京華は窓辺に立つふみのとなりになり立ち、窓を開けた。昼よりかはあたたかさをうしなつた夕風が、不思議ととてもこちよかった。

先とは違う、居心地の良い間が空いた。窓辺に立つふたりは風を顔に浴びて目を閉じて、満足そうな顔をしている。一方で、ふたりの背中をながめる徹は神妙な面持ちでいた。しかし彼もふみのことばに感化されずにはいられなかった。

「俺さ、遠いところに進学するんだよね」

ふたりは振り返る。「知ってた」と言いたげな表情を、徹は見る。

何か言ってくれそうな気がして、急ぐ様に言葉を続けた。やさしさを避けるために。

「だから、本当に俺は今日が最後かもしれない」

最も恐れていたのは彼だったかもしれない。彼にとって三人いるのは前提だった。その前提を崩す選択と行動をしたのは彼だった。彼は罵られる自身の姿を想像していた。

——しかし。

「やっと言ってくれたね」

「な」

返ってきたことばは想像外にやさしく、意外極まりなかった。短い言葉の応酬は徹に自身の進路のゆくえが知られていることを悟らせた。

「……誰かから聞いてたのか」

「んーん、ちがうよ」

「じゃあ、なんで」

切実なまでの声音の質問にふみは顔を逸らし、京華が代わりに言った。

「ストーキングしてたから」

なんでもなさそうに、そう言った。ふみは自身のしたことの異常性を理解しているからか、顔をずっと背けたままだ。

思い浮かべていた返答のどれとも異なるその答えは、当然、徹の思考を一瞬奪った。

「え……はい？」

「ふみの案で」

そこに追い打ちをかけるようにそのひと言である。徹はぱくぱくと動かしていた口を完全に閉口させた。代わりに、顔をゆっくりとふみの方へ向ける。

ふみは諦め、恥ずかしそうに笑う。そして悪びれることもなくあっけらかんと言った。

「だってさ、言わないことをわざわざ聞くのはいやだったし、言ってくれるのをまちたかったの。だからと言ってもらえないままにいるのもイヤだったから、つい」

京華は終始チベットスナギツネのように目を細めていた。それを見て、徹は言い出しつpeg

どちらなのかも、よりやる気があったのがどちらかも知れた。彼にはどちらでもよかったのだが、その言い分をふみから聞くとつい笑いがこぼれた。

「『つい』って………ははっ、そうか、知られてたのか」

責められることがあってもなんらおかしくないと考えていた徹は緊張の糸が断ち切られるのを感じた。こぼれた笑いはたわんだ糸の余波だった。彼は心底安堵した。

「ここから奈良まで行くの大変だったよ。ね」

「うん」

「まさか受験日もついてきてたのか」

「もち」

はは、ともれた笑いは安堵ではなく、呆れだった。

「ま、なにはともあれそんな深刻そうに言わないでよ。私だってここから出るわけだし」

「そうそう、また会えばいいんだから」

思いやりで満ちたふたりの言い様に、でも、と徹は言い下がる。

「京華はまだ県内だろ」

今度は京華が自身の進路を語る番だった。

「寮からいつでも出れるわけじゃないよ」

「そうなの？」

「そうなのか」

京華もそのことを隠していた。しかし徹のように罪の意識はなかった。

「きつびしいルールがいくつもあるから、ね。コンビニに行ってはいけなとか、帰省の際には部長と寮監の承諾を貰わなければいけない、とかいろいろ」

時代錯誤も甚だしい規則に、徹は口をへの字に曲げ、ふみは「ええ」と声をもらした。

「でも、剣道に集中できる環境はありがたい。早くたくさん打ち合いたい」

彼女は目を輝かせた。先への期待がそうさせた。

「でも、とおるも勉強してやりたいことがあるから行くんでしょ？」

「そうだな。親との約束もあるが、やりたいことがあるから行くのはそうだな」

一人残されるふみは心の中の寂しさをひた隠し、からからとわらった。

「残るのはわたしだけかあ……やりたいことが見つからなかったのも」

京華と徹には気の利いた言葉を他人にあたえるだけの甲斐性は、まだ備わっていない。それを知っているふみは間断なく続けた。

「でも、いつでも待ってるから、連絡ちょうだいよ」

言われたふたりは、「もちろん」と頷いた。

約束は守られなかった。

× × ×

田川京華。享年九十。死因——老衰。

剣道強豪高校進学。二年生半ばになるまで公式戦出場記録無し。しかし二年半ばからレギュラーに抜擢。全国高校総体団体戦優勝に多大に貢献する。三年時には副首相に抜擢。個人戦において全国三位、団体二位を記録。大学進学後も全国大会上位入賞者として幾度となく表彰される。大学卒業後、陶芸家に弟子入り。類まれな集中力を発揮し、様々な陶器を作成する。それらは国内外を問わず愛好家を生み、長年にわたり評価される。しかし表彰の場には一度の他顔を出さず。二十九歳の頃に出会った一般男性と恋愛結婚し、男性との間に三人の子を産む。死去する翌日まで陶芸家として在り続け、就寝したまま目を覚まさず。

重永徹。享年八十四。死因——孫を暴走車から庇った際、頭を強く地面にぶつけ、死亡。中学卒業後、一家で奈良に引っ越す。三年間勉強に励みつつも、学生生活を謳歌する。大学は東京の学校に進学する。それを機に一人暮らしを始める。大学在学中に様々なバイトを並行して行う。その種は多種多様だった。自身で貯めた貯金を基にブログと映像制作を始める。多忙な日々を重ね、二十五歳のときに過労が原因で心身ともに病む。入院中に出会った女生に魅かれるが失恋。退院後、日本全国を自転車で行く。その際に玄海町で出会った年上の女生と意気投合し、身体を重ね、心を寄せた当日にプロポーズし、結婚。ブログ運営と映像制作を再開し、三十歳のタイミングで法人化し、また双子をもうける。その後も経営難に遭うことなく順調に会社を発展させる。実母実父とは顔を合わさず、実質絶縁状態に。多忙な毎日を送ったが、愛妻のおかげで楽しい毎日を亡くなる当日まで送る。彼を引いた車両の運転手は飲酒していた。

鈴木ふみ。享年十七。死因——いじめを苦にした自殺。

高校進学直後、女子トイレにて罵詈雑言をぶつけられる他クラスの女子生徒を発見。彼女は見てみぬふりをしないというある種の正しさを持ち合わせてはいなかったが、容赦ないほどの悪意に耐えきれぬほどの強かさを持ち合わせてもいなかった。彼女は正面から車両の激突を受け入れた。光のまぶしさに目を細めた彼女が最期に思ったのは自身を掃除する人と遠くに行ってしまった友人たちへの謝意だった。

× × ×

鈴木ふみという重しを喪った田川と重永は故郷を離れて以降戻ることをしなかった。

葬式以降、ふたりが会ったのは四度だけだった。内二度は喧嘩別れだった。

互いに死に際にそのことを後悔した。

夕焼けの綺麗だった彼と彼女等の故郷は、やがて地図からその名前を消した。